

# 隠されたいたい思想の表出



殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」  
2016年、相模原市緑区

山奇 桑介

新聞

2020年(令和2年)3月13日 金曜日

紙面編集・新口鮎美

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の植松聖被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さん聞いた。

× ×

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別してもされてもいけない」といった言わずもがなの前提が私たちの内面でとっくに破綻していたことを、あらわにしたからです。

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」とを選別する。植松被告、私は「さとくん」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していくたとされている。裁判所がもし、死刑

## インタビュー 相模原殺傷事件半判決

### 作家、詩人の辺見庸さん



判決を下すとしたら、その瞬間に司法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明することになる。私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならぬ」と考える「園」の職員「さとくん」と、目が見えず歩行ができます、しかし自由におもうことができる人者「き

意志とは関係なく「在って



#### 偽装

「月」 寓意（ぐうい）に満ちていても読むことができる。ちんばは「園」に出版される。「月」には、物語の獨自を見えず、思つ自分意識」、「うに話す者たちの動き」、「かまなやん」の目がちんばの「あ想像どんない痛みを考えもそに心をあつて」、「あるおひだまりの姿」、「自身のける」、「でもないことをよくん」にはまどり、「月」の表紙

#### ズーム

たる叙事詩としている。2018年に出版する。「月」は「園」に出版される。「月」には、物語の獨自を見えず、思つ自分意識」、「うに話す者たちの動き」、「かまなやん」の目がちんばの「あ想像どんない痛みを考えもそに心をあつて」、「あるおひだまりの姿」、「自身のける」、「でもないことをよくん」にはまどり、「月」の表紙

## 死刑は被告と同じ論理

サクスだけで食べていい。史を感じる町並みが氣に入るのは大変で、アルバイトをつた。美しい夜景が見ら

■本音  
ヘンミ・ヨウ 1944年宮城県生まれ。長谷川を勤め、日本新聞協会賞を受賞。自動車で講談社ノンフィクション賞、「眼（め）の海」で高見順賞、1★3★7で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」など著書多数。

都合の良いものだけに用まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい一えたいの知れないそんな「本音」が、横たわる日本社会の基盤に、相模原の事件は太いくらいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会を静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表し出だからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間たどりうしない。他人が「在る」「なるふうに扱はれて扱うほど、事件の真相からは離れていく。

「さとくん」は施設で働く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしていない。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者…。社会が抱える優生思想があつた。個人の属性によるものあらゆる場所に優生思想が染みてはなく、その暴力は社会にみわたっている。

ところが日本社会は、重度障害者に優しくいかのうな偽装をしています。たまたまテレビに登場させられれば「ハートフル」な文脈に回収してしまう。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さはとてもないもので、それや「社会」に同調する「個」とは全く欠けています。

本当は自分の周囲から排除されが間われることです。している人、見ないようにしている人々、忘れてしまう人々が「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉などはたくさんあります。それはおためこかじといふものだけはたくさんあります。そ

うに関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人といふ意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成立させているのです。

死刑制度には、問われる罪に対する「共生」「絆」などなどと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおためこかじといふものだけはたくさんあります。そ

## 開業部など公開

少女ドロシー役で親しまれ、ミュージカル映画のスターとして名を成したジュディ・ガーランド。47歳で他界

## 役だと忘れ

した彼女、日本ではあまり知らない、晩年の孤独な姿を描いたのが映画「シティ・虹の彼方に」だ。1968年、ジュディ・レネット・ゼルワイガーには映画の出

を元夫（ルーファス・シーウエル）に預け、ショットの依頼を受けたロンドンに向かう。調子の波が激しく、良ければ持ち前のエンターテイナーぶりで観客を魅了した。だが、子どもに会えない切なさや睡眠薬などの影響から次々と問題を起こし、契約を打ち切られる。

ひとした瞬間にフラッシュ

県内では13日から、ダウタシ・営業部、世界的大手出版社「グラン・シリーズ」の出版人の翻訳家、囚われた盛り込んだハートフルなものが公開。



## ジュディ 虹の彼方に

へんみ・よう 1944年富城県生まれ。局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。『うぶひと』で講談社ノンフィクション大賞、『眼の海』で高見賞、『増補版1★9★3★7』で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」など著書多数。

# 文化

## 松本清張作品読み解く中国の教員・山本さん出版報告会

中国・上海にある復旦大学で「砂の器」を書くまで」(早稲田大学出版部)を刊行した。で開かれた出版記念報告会には山本さんは、かつて全国

## 四季録

先日、「芝居男怨俳句」1句目は同15(1926)年通り過ぎた。(中略)僕の好んでやがていつまでも、まるで変わってしまった。(中略)切り崩され、地元の方々の懇意に心より敬意を表します。私は、同12(1923)年でてわざとらしく躰出している。その25年前に、すでに鬼北町駅がつながつたのが同16年に、2句目はその前年にさだつた道が谷も鐵道敷設讀線として宇和島駅と卯之町駅がつながつたのが同16年ですから、そこまで第六十回大会た俳誌に発表されています。のため、まるで変わってしまった。(中略)切り崩され、(1941)年ですから、私もこれを機に「芝居男」とから、その頃の作かどり赤い車。谷を無遠慮に埋められた線路。その上に赤裸く、當時のこの地方の繁栄ぶり

## 相模原殺傷16日地裁判決



### 作家・詩人 辺見庸さん聞くく

この事件が起きた時、中の職員「さとくん」と、目から近代、現代に至る人が見えず歩行ができます、しかし歴史の中で、非常に大きなかつ自由に「おもう」こと大きな出来事だと直感しましができる人所者「さ」ちゃん。人間は平等であり、人を差別しても、されてもいけないといった言わすもな考え続けます。私たちが「存在の前提が私たちの内面でどこかに破綻していったことをあらわにしたからです。付いたらそうだった」といふ偶然にするものです。

### ■偽装

意志とは関係なく「在ってしまう」という実存について、私たちはどうあらずともう一つの「在り方」である「在りつけ」を誰かに見ながら「在る」ことを考え続けるよこくな職員「さとくん」に心を許している。だがさとくんはある日、「敵対者の空気」をまごつてやつて来る。



殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」=2016年、相模原市緑区

## 隠された優生思想 表出死刑は被告と同じ論理

すとしたら、その間に司法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明することになる。

私は「月」という作品で世の中をよくしなければならない」と考る「園」

が「在る」「ない」を決める。ところが日本社会は、重いが行われ、今は出生前診断が行なわれています。たまたま「命の選別」をしていにテレビに登場させれば、企業では人事評価で「ハートウォーミング」な度の障害がある人、その保護者をより分けている。強い著者が抱える量さはとても弱い者、美しい者と醜い者、正気な者とそうではない者…。あらゆる場所に優生思想が染みわたって

除している人、見ないよう「本音」が、底知れない悪にしている人々、忘れよう意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の生」「糸」などと軽々しく事件は太いくらい打ち込む肯定する言葉だけはたやすくこのような出来事でした。なぜこんなことがあります。それはおためなら、この時代と社會に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したことになります。それはおためなら、この時代と社會に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したことになります。死刑には、問われる

### ■本音

都合の良いものだけに困まれて生きていた、「存在」を意識から消したい格の問題ではない。彼を本當は自分の周囲から排えたいたの知れないそんなエキセントリックで例外的

にテレビに登場させれば、ハートウォーミングな姿だけはたやすく、それがおためなら、この時代と社會に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したことになります。死刑には、問われる

な人間たどりつづくに扱えば扱つほど、事件の真相から離れていく。「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り扱う際に話せないきちゃんは、自分を見た者が「ありまじりの文言」オキノドクニシヤ「あらさまな嘆息」で自身の姿を想像する。請われているわけでもなく、誰にも分かる「在りつけ」ことを誰かに見ながら「在る」ことを考え続けるよこくな職員「さとくん」に心を許している。だがさとくんはある日、「敵対者の空気」をまごつてやつて来る。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を「そういうではないのかもしれない」と保留することができます。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における厳嵩(じゅんげん)さが聞われるここです。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を「そういうではないのかもしれない」と保留することができます。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における厳嵩(じゅんげん)さが聞われるここです。

# 少年大会

## 野球中学

米澤はイメージです。実際とは異なる場合があります。

『俳誌』(2月号)「うまい曲りゆく」、野本未枝「軒先につるす干柿たわむし竿」、篠崎光城「煤払逃亡謀る家の主」。松山市祇園町11の10、臺俳句会80円

『紙面編集』西崎計典

### 愛媛初壇

句作りは生みの苦しみ多作する

風呂が沸く音が心に温かい 渡辺南奉選

八幡浜野井 澄 四国中央石川明憲 余生とは生と死に日々生きる 同岡田加代